

対話をうながす学習環境デザイン (2) —教員のリスクに着目した性教育デザインの検討—

○宮川亜実 (横浜国立大学大学院)
郡司菜津美 (国士舘大学)

有元典文 (横浜国立大学)

キーワード：性教育，対話，学習環境デザイン

問題と目的

性教育は、自他の性を理解し自己決定ができる力を育むために行われる (文部科学省, 1996) ものであり、現実の他者理解は主に「対話」のやり取りによって行われる。しかし、性教育は学習者がネガティブな印象を抱く (上田, 2014) だけでなく、指導する側も、性教育の特質に起因する実施への躊躇 (岡本, 2014)、やり方が分からない (佐光ら, 2014) というリスクを抱えている。そこで、本研究の目的は、「対話」に基づく性教育における教員のリスクを明らかにし、学習環境デザインを検討するための基礎研究とすることである。

方 法

調査対象者 首都圏公立中学校の教員 24 名を対象に自記式の質問紙調査を実施した。有効回答者は 15 名 (回収率 62.5%) であった。調査は、2020 年 1 月下旬から 2 月上旬にかけて行った。

調査内容 性教育に対する意識に関しては、「性教育のイメージ」「性教育の必要性」「性教育の適任者 (複数回答可)」3 項目の回答を求めた。「対話」に関しては、性教育において生徒が「対話」をする必要性について (6 件法)、性教育において生徒に「対話」させる抵抗感について (6 件法) 2 項目の回答を求めた。なお、質問紙に、研究の趣旨、個人情報保護などを記載し、質問紙の提出をもって同意とみなした。

結果と考察

質問紙から得られた結果は、項目ごとに単純集計を行い、自由記述は KJ 法を援用した。

性教育に対する意識

中学生に対する性教育の必要性については、15 名 (100%) が必要であると回答した。性教育を実施する適任者については ($N=40$)、医療従事者が 12 人 (30%)、保護者が 10 人 (25%)、養護教諭 8 名 (20%)、研修教員 7 人 (18%)、教員 3 人 (8%) の順に多かった。榎谷ら (2009) の高校教員への調査でも、家庭教育に依存する傾向があることが報告されており、本研究でも類似の結果となった。また、性教育のイメージについては、大切だけど難しい、恥ずかしいといった「感情」と月経や出産といった「指導内容」に関する記述がみられた。

「対話」の必要性和抵抗感

「対話」に基づく性教育の必要性については、「必要がある」が 6 人 (40%) 「必要がない」が 8 人 (54%) であった。その理由を各群分類したところ総切片数が 12、5 カテゴリーに分類された (Table 1)。また、生徒に「対話」をさせる抵抗感については、「抵抗がある」が 10 人 (67%) 「抵抗がない」が 5 人 (33%) であった。その理由を各群分類したところ総切片数が 12、6 カテゴリーに分類された (Table 2)。

Table 1 「対話」の必要性についての理由

群	カテゴリー	N	具体例
必要ある	対話の必然性	3	性は他者抜きに語れないから
	知識の定着	2	正しい情報と知識を指導した上で
必要ない	生徒のリスク	4	嫌悪感を抱く生徒もいるから
	場のリスク	2	公の場で子供同士が話すべきでない
	その他	1	他者理解は他のテーマでできるから

Table 2 「対話」をさせる抵抗感についての理由

群	カテゴリー	N	具体例
抵抗あり	生徒のリスク	3	自己開示が出来ない生徒もいるから
	教員のリスク	2	恥ずかしいから
	科学的概念の定着	2	知識が定着していないと難しい
抵抗なし	過去の経験	1	性教育担当の経験があるから
	対話の必然性	2	対話の無い授業に違和感を抱くから
	知識の定着	2	まずは正しい知識の獲得が大切

郡司 (2016) は、生徒にとって、性は自己関与性が高いが故に恥ずかしさが表れやすいとし、実態にあった学習環境デザインを提言している。本調査でも、性教育のイメージと「対話」の抵抗感において「恥ずかしい」という回答があったことから、教員においても性は自己関与性の高いものであり、授業をする際のリスクとなることが示唆された。つまり、学習者と教員の恥ずかしさが混在する学習環境では「対話」を賦活することは難しいことが考えられる。しかし、5 割が性教育の適任者を医療従事者及び保護者と回答していること、「対話」の必要性和抵抗感に対する理由において、正しい知識の定着が優先であるという記述から、医療従事者をはじめ多様な参加者の共同的な学習環境の創造が生徒と教員のリスクを下げ、「対話」を賦活しやすいことが考えられた。

本調査の結果から、「対話」を賦活するためには、教員は教えるという一方向の立場にならず、むしろ今あるリスクを抱えた状態で、学習者としても参画するデザインが効果的であることが考えられた。今後は、生徒と教員の「立場」のリスクを「学習環境」のリスクとして捉え学習環境デザインの検討を行っていききたい。